

インド仏教史の時代区分

三 枝 充 憲

インド仏教史を、初期・中期・後期に三分割するという時代区分を提案したい。1にはそれを行なう所以を四点にわたって述べ、2には従来の諸研究を渉猟し、3に右の時代区分の内容を論ずる。したがって、3が拙論の骨子となる。

1

インド仏教には釈尊（ゴータマ・ブッダ）という明確な始元（Anfang）が存在する。そして、もしもインド仏教がその始元において確固たる定説を構築し、不動のまま後代まで持続されたという経緯を辿ったのであれば、時代区分は無用であり、この類いの設問自体が無意味に帰する。たとえば『リグ・ヴェーダ』、あるいはパーニニの文典のごとく、三千年ないし二千数百年以前に確定され、以後まったく変化を受けないことなく一貫して保持されており、いわば原型が現存するというケースでは、時代区分を問う余地はない。

それに反して、インド仏教は、釈尊以後千五百年の長い

期間に、あまりにも多くのことがらが生起し（geschehen）、明らかに歴史（Geschichte）を形成している。その間の推移はまことに複雑多岐にわたり、インド仏教は明白・確実にインド仏教史として展開した（以上⁽¹⁾）。

しかし種々のことがら・諸事象が生起するという場合、それらの一々のデータをただそのままに羅列して記録するというのではなくて、それらの諸事象とデータとを或る統一的な視点から考察し、その視点による一種の価値判断にもとづいて、それから重要視され得るもののみを選択して記述するところに、真の意味の歴史は成立する。

さらに歴史において肝要なことは、どのような時代においても、それぞれの時代に生きた人々はすべて、その時代を「現在」（現代）としていたのであり、各々の現在（現代）における諸活動がデータに残されている。そのために、極言するならば、歴史の内部に沈潜しているかぎり、たとえ縦横に価値判断を走らせ、また統一的な視点に依拠したとして

も、そこには歴史の記述はあつても、末だ時代区分の考察には到達し得ない。このことはたとえば大島康正博士の少壮時代の著『時代区分の成立根拠』に詳述される。一例をあげれば、歴史(学)の創始者とされるヘロドトスならびにツウキュジデースは、歴史記述をスムーズに行なり一手段として、歴史の推移を巻別に分類するという方法を採用したものの、それ以上の進展を見ることはなく終わった。同書(四五ページ)によれば、「古代ギリシアにおいて時代区分を試みたものは、ポエオチアの農民詩人であり、かつ宗教詩人であった「ヘシオドス」に帰せられる。それは、「時代区分は本来人間の歴史の区分でありながら、しかも事実において固有の歴史そのものの内部からは成立し得ず、かえって超歴史的なものに根拠づけられて、歴史外的なものとの媒介の上に、その転換が規定せられてくるということ」にもとづく。

こうして、古代ギリシアのヘシオドスにより、中世には、エウセビオス、アウグスティヌス、パウルス・オロシウス、あるいはセヴィリアのイシドルスのような、神学者ないし宗教哲学者によって、時代区分が主体的に試みられた。近代に入り、その指導の理念は、一語であらわせばヒューマニズムであり、しかも「この理念自身の本来的な性格は、つねに人間的な普遍性、すなわちいわば人間の全人的把握の理念であつた。……このようなヒューマニズムの理念に根拠づけられ

て、近代の代表的な時代区分の試みとして最初に登場したものが、いわゆる時代三分法(Dreifachung)——世界史を古代・中世・近代(Altertum, Mittelalter, Neuzeit)の三期に分かつそれである」(以下にさらに叙述は続くがすべて略す)(以上②)。

インド仏教史はいちおう十三世紀初頭をもつて終末を迎えた、ということができよう。すなわち、イスラーム軍による一二〇三年のヴィクラマシラー大寺の徹底的な破壊とともに、それまですでに衰運がその足下に迫っていた仏教は、インドに消滅する。換言すれば、この大寺の喪失によって、仏教のセンターであるサンガが滅亡したあとには、インド仏教を継承して行く依所はない。確かに、敬虔な出家者や在家信者がなお散在して、なんらかの仏法を伝え、あるいは小規模の寺院が暫時残存したとしても、それらは永続し得ない。経典類は散逸して消え、往時のストウーパを初めとする記念碑的なものは、次第にまたは急激に仏教遺跡と化して行く。

ときに、近隣のネパールなどの大乘仏教、スリランカなどの長老仏教が、インドに多少の刺戟をあたえたであらうけれども、見るべきものはすでない。十九世紀末にダンマパラーによって大菩提会がインドに設立され、二十世紀半ばにはアンベードカルなどの指導のもとに、いわゆるネオ・ブッディズム運動が一時盛りあがり、一九六一年の国勢調査に仏教徒三二五万人の数があげられてはいるものの、これらはいず

れも、かつてのインド仏教との断絶があまりにも大きい。

こうして、インド仏教史は、およそ前五世紀の始元と十三世紀初頭の終末とが、厳として存在し、その間の千五百年余年に関して時代区分が施される(以上③)。

仏教の始元からの約百年間(別説二百年)を、わが国では原始仏教と呼ぶのが明治中期以来の慣例となっているとはいえ、おそらくこの呼称の原語と推定される primitive Buddhism, Urhuddhismus に関する考察が深まらなれば、もはや外国で使用される例は極端に減少したにも拘らず、わが国のみひとり現在もなおこの名称が広汎に用いられる。かねてそれへの不満と不信を抱いていた私は、なお不完全を残すものの可能なかぎりの資料を集め、欧米の諸言語やキリスト教との比較などをも含む諸方面からの考察を行なつて、この呼称を廃し、「初期仏教」と呼ぶのが妥当であろうとの小論(「原始仏教」について^③)を発表した(小論に対する批判を切に希望する)。こうして、初期仏教と命名する以上は、当然それ以降のインド仏教史をいかに扱うかを明確にしなければならない。

右の初期仏教の名称は、すでに拙著『初期仏教の思想』で用いており、その中の論文の初出は一九七三年四月であつて、私自身はこの名称に十余年間なじんでいる。その間に、たまたま拙著『ヴァスバンドウ』の冒頭^④に、インド仏教史のごく大まかな梗概を記すスペースがあり、初期・中期・後期

インド仏教史の時代区分(三枝)

の三分割を論じた。この拙論にもそれを採用するが、中期と後期とを区分する年代に関して、その後に熟慮を重ねて現在に及び、右の拙著の記述に対する異論が生じているので、この点は以下の③に詳述する(以上④)。

2

インド仏教史はインド史の一部であるから、まずインド史に関する従来の諸研究を見てみよう。

それは当初はインドを領有支配していたイギリスが主流をなし、Cambridge のものも、Oxford のものも、もしくはインド人の H. H. Dodwell の研究も、イギリス統治時代に重点が置かれる。この風潮は時代とともに次第に稀薄化するといえ、それでもたとえば山本達郎編『インド史』および岩本裕『インド史』にも、占めるページ数においてはやはり右の傾向を脱していない。比較的最近の研究書の代表として Romila Thapar と Percival Spear とによる Penguin Books の『インド史』^⑤を見ると、全体を章に分かつのみで、時代区分的な配慮は欠ける。ただしここでは、ヒンドウの扱いが前述の諸研究書に比して倍増している点に、とくに関心が集まる。

以上きわめて概略的な考察によつても、インド史の専門家による時代区分は、周知のとおり、古代、中世、近世(近代)

の三分割を取る。そして古代は大むね七世紀半ばのハルシャ王朝の瓦解まで、ときに十二世紀末にゴール王朝が北インドを征圧する時代まで、中世は右のあと、ほぼ一七五八年のブラシーの戦いにイギリス軍が勝利を収めてインド統治を不動のものとするまで、近代をそれ以降とする。さらには、古代をヒンドゥ時代、中世をイスラーム時代、近代をイギリス植民地時代(続く時代をインド独立時代)と特徴づける。

右のとくく古代の年代に関して、D. D. Kosambi『インド古代史』は十二世紀まで、Ram Sharan Sharma『古代インドの歴史』は七世紀までとするのに対して、中村元『インド古代史』はクシャーナ帝国の時代すなわち三世紀までとし、したがって中村博士は、グプタ王朝期の四世期初めからイスラームの侵入がインド中央部に達する十一世紀までを中世とされて、この間をヒンドゥ時代と見なしておられる。

つぎにインド哲学史・インド精神史・インド思想史といった類いの研究書を渉猟すると、そのほとんどすべてが、テクスト・個人・学派・王朝などの固有名詞をもって、各章を構成し、それによる通史が論ぜられる。

宇井伯寿博士の『印度哲学史』は、序論に第一期エーダ時代と第二期ブラーフmana時代のあと、本論は、第一期(計十章)が前八四〇年～前三五〇年、第二期(計十三章)が前三五〇年～後一五〇年、第三期(計十五章)が一五〇～八〇〇年とさ

れ、そのなかの各章は右に述べた固有名詞による。あと余論に、八〇〇年以後の状勢を付言する。

金倉圓照博士には『印度古代精神史』と『印度中世精神史』上中二巻とがあり、古代を前五〇〇年まで、中世を前五〇〇～後五〇〇年の約千年とし、古代より中世への過渡期にスートラを挙げ、中世は「法典文学の終をもって下限とした」とされる。また「印度精神がその特異性を完全に実現したのは、まさしく中世においてであった」ともいわれる。しかし金倉博士の『印度哲学史要』と『インド哲学史』には、「印度哲学史は一つの渾然たる集団をなしている所に特色が認められる。西洋においては、古代哲学は中世思想によって排除せられ、中世思想は近代哲学によって揚棄せられた。しかるに印度ではこれに相当すべき事象は認識せられない。……一度できた体系は、後に他の新しい有力な思想が生まれても、依然それと並行して生命を保って行く」と強調される。

中村元博士の『インド思想史』は、全体を十章(十一章に付論)に分ち、種々の固有名詞と歴史学の諸術語とを巧みにミックスして論述される。時代区分は明示されないものの、中にはたとえば「中世的宗教」の語により九世紀ないし十一世紀ごろ以降を指示し、続いて「近代的思想」の語を用いて十四世紀以降の諸思想家を論じておられる。中村博士の

大著『世界思想史』全七巻は、古代思想、普遍思想(上・下)中世思想(上・下)、近代思想(上・下)より成り、世界思想全体を扱う中で、とくにインド思想史に注目すると、古代はウパニシャッドまで、普遍思想は前六〜五世紀以降、ただし時代区分の扱いはこれが中世に含まれ、近代はほぼ十五世紀以降とされる。しかしこれらはときに錯綜しており、右の年代の明確となしがたい旨が語られる。

最近の早島・高崎・原・前田『インド思想史』は、古代、中世、近・現代の三分割を掲げて、古代をヴェーダから仏教の唯識・如来藏また六派哲学確立まで、中世をグプタ王朝崩壊の五世紀よりおよそ十七〜十八世紀までとし、近・現代に英領インドおよび現代の動向を扱う。

ただ一点のみ、外国書の代表として、Walter Ruben『インド哲学史』は全体を三十一章に分け、固有名詞による各章のもとで論ぜられて、時代区分はない。

最後に、インド仏教史の従来の諸研究を検討しよう。

古くは、正法・像法・末法による(後五百歳説)を含む時代区分があり、これは明らかに(ほぼ人類に共通の)時代下降思想というイデーにもとづく。また幾多の中国仏教者と何人かの日本仏教者とによって、世にいう「教相判釈」(教判)が施され、これも一種の時代区分であるとはいえ、これら両者は、現在においてはもはや取りあがるに及ばない。

インド仏教史の時代区分(三) 枝)

さらに小乗と大乘という区分があつて、これはかなり広く流布しており、今日の欧米で公刊されるインド仏教史(インド思想史の類いを含む)にもなおしばしば見うけられるもの、小乗の語の不適切な濫用が反省されて、少なくともわが国の学界ではほとんど消滅した。

この小乗仏教の不当な語を、原始仏教と部派仏教とに分割して論じたインド仏教史に、龍山章真博士の著があり、1原始仏教時代、2部派仏教時代、3大乘仏教時代、4密教時代と四分割する。これと類似のものに、André Bareauの著があるが、これは別人のドイツ語訳なので、原文のフランス語は不明ながらも、ほぼ右の四分割に近い。

古くはターラナータのインド仏教史から、新しくは佐々木・井ノ口・高崎・塚本『仏教史概説・インド篇』まで、また奈良康明『仏教史』も、さらにはE. J. Thomasの仏教思想史なども、前述したような固有名詞による章立てのもとに、通史を記述している。

最も詳細な学術書は平川彰博士の『インド仏教史』上下二巻と思われるが、これは全体を、1原始仏教、2部派仏教、3初期の大乗仏教、4後期の大乗仏教、5秘密仏教と、五分割がなされる。大乘仏教が初期と後期とに二分されて中期の語は現われないけれども、4のなかに「中期大乘經典」の語があつて、かなり詳細な説明が加えられる。

3

インド仏教史に時代区分を施して三分割する。これはインド史または西洋哲学史の三分割と共通する。ただし上述のとおり、インド仏教史はインド中世に衰滅しているために、古代・中世・近代(近世)ではなくて、初期・中期・後期とするのが最もふさわしい。以下にそれぞれの内実を述べる。

初期仏教は、一般に原始仏教と呼ばれているものに符合し、釈尊から第二結集の根本分裂までの約百年(別説百余年)

間、ときにはアショーカ王を含むマウリヤ王朝繁栄の時代までの約百余年(別記約二百年)間をいい、この時代に、仏教が創始され、その教説・実践・教団などの基盤が固められて、いわゆる初期経典(律蔵を含む)が成立し、それが口誦によって伝承される。ただしこの時代は、どちらかといえば、仏教がいわば対外的に拡大して行く方向にかなり忙しく、また口伝には増広や削除や再編集などが混じて、それらはつぎの中期仏教の初頭にほぼ現存する形に編集されて固定する。

中期仏教は、そのあとを継いで、一方に部派仏教を、他方に暫く遅れて(初期)大乘仏教の興起と繁栄を迎える。この時代に仏教は最も活気に溢れて、僧俗ともにインド民衆の多大の支援を獲得し、一言であらわせばそのクライマックスに達する。詳述すれば、部派は再―細分裂(枝末分裂)を重ね

た末に、二十あまりの各部派ごとに、それぞれの教義を確立し、初期経典(律蔵を含む)を確保して固定した中に、傑出した論師たちによる諸論書が数多く成立する。しかしここには専門家の出家者中心の色が濃い。おそらくその風潮を傍らに凝視しつつ、敬虔で熱心な在家信者のグループが各地に散在し、それらの動向と連携して、やがて大乘仏教運動がようやく散発的に兆し始め、それはついに初期大乘経典群を生む。そしてそれらがかかり出揃ったあとに、たとえばナーガールジュナのような大論師が登場し、卓越した論書によって不動の地位を築く。ただし北インドはクシャーナ王朝樹立までは、外来民族の侵略が相いつぎ悪逆非道の横行した乱世の中で、大乘仏教の多くは、従来の解脱中心から救済探究の途を追い求め、ここには無力な在家信者の切々たる願望が強く反映する。そのほか一般的に、大乘仏教は自己の完成よりも他者への指向に大きく傾き、それは別の角度から見れば世界宗教へのアプローチを開拓する。

上述したように、拙著『ヴァスバンドゥ』では、中期仏教を七世紀の密教確立までとしたけれども、つぎに掲げる諸理由により、グプタ王朝の成立する三二〇年すなわち四世紀初めまでを、中期仏教と扱いたい。

第一は、グプタ王朝という完全なヒンドゥ王朝がインド統一を果たして、ヒンドゥ教がインド全土に隆盛を極め、六派

の正統哲学、サンスクリット文学、それまで伝承されてきた大叙事詩やプラーナ聖典や諸法典や政治論書の完成などが、百花妍を競い合う。確かに、この時代に仏教においても中期大乘仏教と概括される新しい思想・学説が興り、大寺院での仏教は勢力を振ったとはいえ、すでに仏教に対する民衆の帰依は次第に衰退に向かつてインド社会からはやや孤立しつつあり、またこの時代以降の仏教の諸論師はインド哲学の各派との論争をもはや回避することが不可能の状況に陥る。

第二は、右と関連して、中期仏教の前半ごろまで（とくに前二世紀（後一世紀）盛んに見られたストウーパの建立とその繁栄とは、すでに影をひそめる。一部には大塔を建て窟院を拓くなどの事業が存続するものの、ヒンドゥ化の着実に進行する中で、民衆の仏教からの離脱はやがて決定的となり、やや年代は下るとはいえ、玄奘のインド旅行（六二九～六四五年）に記される荒廃した仏教遺跡への哀悼は、釈尊成道の地ブッダガヤーまでも含まれている。

第三は、ほぼ五世紀と推定されるアサンガとヴァスバンドゥとの傑出した業績がとくに目立つけれども、かれら二人だけを中期仏教に編入するのは、どこかそぐわなないばかりか、かれらを継承する仏教学の伝統は以後絶えることがなく、おそらく十一世紀のモークシャカラグプタあたりまで延々と続いて、思想的にも学説上もあるいはたとえばヨーガーチャ

ーラの実践なども、かなり緊密に連結しており、その途中の七世紀で切断するにはあまりに無理が多い。

第四に、密教が七世紀中葉に『大日経』を成立させる以前に、すでにかなり濃厚な密教的色彩が般若經典群ほかの大乗經典の多くに浸透し、とくに陀羅尼の付随が顕著となる。

そのほか、たとえば如来蔵―仏性思想には活力ある宗教に必須の一種の断固たる否定的要素が欠けており、世俗との妥協が強まって、やがては即身成仏を謳う思想へと連結する可能性も窺われるなどがあり、このテーマは更めて論じたい。

以上のように中期仏教を三二〇年をもって幕を引き、以降は後期仏教として扱う。後期仏教は、中期ならびに後期の大乘仏教が栄え、また往時より派の数は減じたものの依然強力な部派仏教の側では、次第に大乘仏教との境界が稀薄となり、やがては、隆盛を迎えた密教にすべて占められる。

なお、以上の三分割において、さらに釈尊とそれに近接する時代を最初期、また左道密教が栄える九～十世紀以降を末期とし、ならびに三期の全般にわたり、それぞれ前半、中葉、後半など、必要に応じて細分する余地は大きい。

最後に付言を三つ記す。

第一は、右の三期を英語で表現する際は early, medieval, later とする。

第二は、右の三分割による時代区分は、たとえば西洋哲学

インド仏教史の時代区分(三) 枝)

史の古代—中世—近代と同様、一部に錯綜し重複し合う。

(なお今日の西洋哲学史研究ではこの点がとくに指摘され、一時的にたとえば近代が「中世の闇黒」「中世の克服」をスローガンに掲げても、実質的には決して中世を排除も揚棄もしておらず、却って継承する個所が多く立証される)。インドは周知のように年代決定が困難を極め、諸事象のデータは一部が継続し一部が断絶して、前後不明も少なくない。

第三は、右の時代区分のいわば宗教哲学的根拠の一つとして、ブッダ観をあげたい。カントの術語で表現すれば、ブッダは、初期にはイデー(理念)的存在、中期にはイデアール(理想)的存在、したがってこの超越的存在が、後期には内在的存在に変貌する。または、中期仏教において、部派のアラカンと大乘のボサツとは、ともにブッダと或る距離を保持するという点において、ややパラドクシカルな共通性が指摘され得よう。これらは機会を改めて論考を尽くしたい。

1 大島康正『時代区分の成立根拠』初版は一九四九年、筑摩書房。ここには一九六六年の再版、理想社によった。

2 同書、六三—六四ページ。

3 拙論「(原始仏教)について」(『東洋学術研究』25—1、一九八六年五月刊)。

4 拙論「初期仏教思想シリーズ①古ウパニシャッドと初期仏教(上)」(『東洋学術研究』12—1、一九七三年四月刊)。

5 拙著『ヴァスバンドゥ——人類の知的遺産14』講談社、一九

八三年、五—一四ページ。

6 ロミラロターバル『インド史』1と2、辛島・小西・山崎訳、パーシヴアル・スビーア『インド史』3、大内・李・笠原訳、みすず書房。原著は一九六五—六六年刊。

7 コーサンビ著、山崎利男訳『インド古代史』岩波書店。原著は一九六五年刊。

8 R・S・シャルマ著、山崎利男・山崎元一訳『古代インドの歴史』山川出版社、一九八五年。原著は一九七七年刊。

9 中村元『インド古代史』上下(『中村元選集』5と6)、春秋社、一九六三—六六年。

10 金倉圓照『印度中世精神史』上、岩波書店、一九四九年、四—五ページ。

11 同『印度哲学史要』弘文堂、一九四八年、四—五ページ。同『インド哲学史』平衆寺書店、一九六二年、五—六ページ。

12 龍山章真『印度仏教史』法蔵館、一九四三年。

13 Der Indische Buddhismus von André Bareau (*Die Religionen Indiens III, Kohhammer, Stuttgart 1964*) は 'Der Ur-Buddhismus, Der alte Buddhismus, Das Mahāyāna, Der Tantrismus' の章を分かつ。

14 たとえば平川彰『インド仏教史』下(春秋社、一九七九年)六—七ページ参照。

(昭和60・61年度文部省科学研究費一般研究Bの成果の一部)
(筑波大学教授・文博)